

## ボランティア部門 (国内)

のむらけん

### 野村 健

社会福祉法人 後志報恩会 理事長

1970年、北海道に知的障害者更生施設「銀山学園」を創設。知的障害者に生きがいを感じられるように積極的に地域住民との交流を実施、合わせて知的障害者への差別感をなくすことにも努め、学園の職員は文化やスポーツ面で地域を支援している。「施設づくり」から、障害者達も一体となった「地域づくり」に尽力している。

推薦者 皆川 尚史 厚生労働省 社会保険業務センター 所長



北海道では、精神薄弱者福祉法施行後、1961年に道立知的障害者更生施設が設置された。しかし、厳しい経済社会情勢下で満足いくものでなく、過酷な経営を強いられるものが多かった。野村健氏は10数年に及ぶ札幌市ケータスワーカーの職を辞し、学園創設、地域づくりを目指した。

1970年、北海道の豪雪地、仁木町銀山の地に知的障害者更生施設「銀山学園」を開設。志あれども、金は無い、施設も無い、風が吹けば停電、雨が降らねば断水、という状況下で障害者との暮らしが始まる。

この学園には、明日の生活もおぼつかない、貧農の子や、厳しい環境の障害者、来園した子どもには、10年も風呂に入れない子などいたが、そういう人々を特に選び入園させた。

70人の障害者と職員の共同生活の中での野村氏は「施設づくり」から、障害者が人間らしく生活できる「町づくり」を目指した。

今でこそ主流となった、地域のなかの障害者生活を、40年間も実践している。銀山学園では、障害者と住民との交流行事が地域づくりという活動につながっていて、そのおかげで「人がそこに住む」ということの深い意味を考え、行動している。

野村氏は、「人の痛みが分かる感性が、福祉、医療、保健にたずさわる仕事をする私たちに必要なものだ」と思っている。

ます。」と言う。野村氏の夢は、他人の痛みを感じる感性をまず自分自身で磨き、支えあつていきいきと生活することができ、感謝して人生を過ごす「福祉文化社会」を創造すること。野村氏は夢に向かって、生涯を知的障害者の生活に、また彼らと一体となった地域づくりに捧げているのである。



■設立当初の銀山学園全景



■地域との交流は図る学園行事



■開設当初、入所者と一緒に働く野村理事長(当時:園長)

「だれもが、人間らしく生活できる町づくり」を目指して。